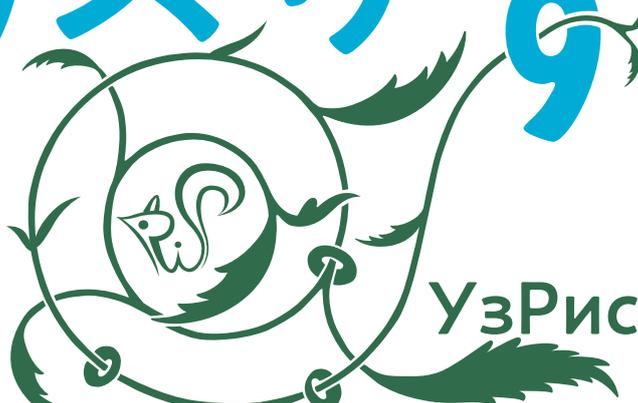


# ウズリす



УзРис

文部科学省選定  
「私立大学研究ブランディング事業」

立正大学ウズベキスタン  
学術交流プロジェクト  
ニュースレター

2019.07  
第3号



調査活動報告 2019年3月ウズベキスタン学術調査隊

よりみちリサーチ1 ウズベキスタンの墓地 (2)

よりみちリサーチ2 ウズベキスタンの言語風景

よりみちリサーチ3 サマルカンドからテルメズへのルートをたどって

本の紹介 佛教東漸 シルクロード巡歴

大月氏 中央アジアに謎の民族を尋ねて

博物館みて歩き テルメズ考古学博物館

みやげばなし 青いウズベキスタンと「ウズリす」の唐草模様

# 調査活動報告

## 2019年3月ウズベキスタン学術調査隊

今回の活動の中心は、建築史・地盤工学などを専門とする先生方にズルマラ仏塔の毀損状況や周辺地盤などをみていただき、アドバイスを今後の活動方針に役立てることと、二国間の交流活動としての本学教員による日本文化講演会でした。

立正大学文学部 准教授(東洋史)、調査隊隊長 **岩本篤志**

専門は内陸アジア史、中国南北朝隋唐史。  
現地の食事はプロフ(バラフ)、ラブシャがおすすめ。



テルメズ考古学博物館にて記念撮影



講演会終了後記念撮影

## 報告

2019年3月の調査活動の目的は4つありました。

1. ズルマラ周辺調査(毀損状況、地盤などの調査、気象観測装置の修理)
2. テルメズ国立大学(以下、テルメズ大)にて9月の調査の報告
3. 本学教員による日本文化講演会
4. 2019年秋の活動に関わる調整

今回のウズベキスタン滞在は、関係者のスケジュールの都合もあり、きわめて短期間でした。

まずテルメズに到着した3月7日に、テルメズ大にてズルマラ仏塔の発掘調査の報告会と本学教員による日本文化講演会がおこなわれました。先方は発掘調査報告会と日本文化講演会のために講演会場に学生や教員を集めてくれました。会はテルメズ大学長の挨拶ではじめられ、まず岩本が9月の発掘調査の報告をおこないました。内容はズルマラ周辺の発掘の目的と成果だけでなく、毀損した原因の推測、今後の提案におよびました。今村栄一氏にはロシア語への通訳をお願いしました。またテルメズ大側でもザキル・ハリコフ教授が9月の際の発掘遺物の報告をおこない、お互いの意見交換をすることができました。

続いて、同じ会場で本学教員による日本文化講演会がおこなわれました。

前回同様、ウズベク語への通訳してもらったかたちで進行了。先に本学経営学部の高橋俊一准教授による「日本企業の海外展開」の講演が行われました。高橋先生は会場とのテンポのよいやり取りをまじえ、学生の反応も上々でした。次に本学心理学部のウンサーシュッツ・ジャンカーラ准教授による「世界が見るマンガ、マンガから見る世界」の講演が行われました。両先生の講演への質問や感想も興味深いもので、ウズベキスタンのマンガの歴史への言及もありました。

夕方には岩本は現地を訪れていた富士通株式会社の方々とともにテルメズ考古学博物館を訪問し、フディベルディエフ館長と博物館のデータの電子化や本学調査隊との協力などについて意見を交わしてホテルへと戻りました。なお、3月7日のうちに同行いただいた他大学の先生方には、テルメズ市内の見学をしていただきました。

3月8日は、国際女性デーにあわせ、「女性の日」として休日です。しかし、テルメズ考古学博物館館長のはからいで博物館を開館していただき、館内をゆっくり見学させていただきました。その後、ズルマラ仏塔の見学・予備調査をおこないました。毀損状況、地盤調査の前提となる状況確認のほか、気象

観測装置を修理しましたが、この日は稼働に至りませんでした。

その後、食事後に郊外に移動してカンピル・テベを訪れ、帰りがけにファヤズ・テペ、アルハキームアッテルミズィー廟と廟内の博物館を見学してホテルへと戻りました。

3月9日は、朝からズルマラ仏塔の気象観測装置の調整に向かい、高原先生に助けをいただき、再稼働に成功しました。そして昼にはテルメズ空港からタシュケントへと移動しました。テルメズ滞在はこのようにきわめて短かったのですが、密度の濃いものになりました。個人的には2014年からテルメズ滞在中には毎回、車の運転手をつとめてくれたバホディールさんが亡くなられたとの情報に落胆しました。彼の車は調子が悪くなることもありましたが、数多くの遺跡を案内してくれただけでなく、必要とするものをすぐに見つけてくれる小回りのきく器用な人でした。

3月10日は日曜日で、自由行動となりました。シュッツ先生は電車でサマルカンドに向かい、ほかの方々はタシュケント市内の博物館や建築物をみてまわりました。

3月11日は調査隊の中心メンバーはウズベキスタン科学アカデミー芸術学研究所でピダエフ所長と面会し、その後、

同行いただいた先生方と一緒に在タシュケント日本大使館にて活動報告すると同時に、現地の状況について教えていただきました。その後、安田、岩本、紺野はウズベキスタン日本センター(UJC)で開催される高橋先生とシュッツ先生の日本文化講演会のアシストにむかいました。会場の聴衆の集まりはいまひとつでした。会場によってこれほどの差があるとは予想してませんでした。参加して下さった方々の反応がよかったのは幸いでしたが、公開講演に対する両国間の考え方の差異が大きいことに気がさせられました。

帰国後に、同行いただいた先生方からは多数の重要な示唆をいただきましたので今後の活動にかかしていきたいとおもいます。



高橋先生講演の様子

## 日程概要

凡例(敬称略、前出・本号執筆者の所属略、所属は渡航時)

- 1…ウンサーシュッツ・ジャンカーラ
- 2…安田治樹(仏教学部教授、調査隊長)、岩本篤志、紺野英二
- 3…高橋俊一(経営学部准教授)
- 4…増井正哉(京都大学人間・環境学研究科教授)、塚脇真二(金沢大学環日本海域環境研究センター教授)、高原利幸(金沢大学理工研究域地球社会基盤学系助教)、加藤直子(国士舘大学イラク古代文化研究所共同研究員)
- 5…今村栄一(名古屋大学アジアサテライトキャンパス学院プロジェクト調整員)

3/5(火)

1 タシュケント: 入国(仁川経由)

3/6(水)

2 3 4 タシュケント: 入国(仁川経由)

3/7(木)

1 2 3 4 5 タシュケント → テルメズ: 1 2 3 テルメズ大にて講演会、4 市内見学

3/8(金)

1 2 3 4 5 テルメズ: テルメズ考古博物館、ズルマラ仏塔ほか遺跡調査・見学

3/9(土)

1 2 3 4 5 テルメズ → タシュケント

3/10(日)

1 タシュケント ⇄ サマルカンド

3/11(月)

2 5: 芸術学研究所、2 4: 日本大使館、1 2 3 5 ウズベキスタン日本センターにて講演会、1 2 3 4 帰国便へ

3/12(火)

成田: 帰国(仁川経由)



# ウズベキスタンの墓地(2) ～タシュケント・YAKKASARAY 墓地

立正大学文学部 教授(考古学)、  
調査隊副隊長 **池上 悟**

専門は仏教関係遺跡・遺物などの研究。  
ウズベキスタンの夏は暑いけれども、なかなか良いところもあります。

墓地は各国の伝統文化を表しています。  
ウズベキスタン各地の墓地は、地域に根ざした様相を示しており、  
また歴史的財産として位置づけられています。

## 日本人墓地の歴史

ウズベキスタンの首都タシュケントの西郊に、YAKKASARAY 墓地が所在しています。この墓地には、第2次大戦後にウズベキスタンに移送された後に現地で死亡した79名の日本人抑留者が埋葬されています。この墓地はウズベキスタン国内に13箇所存在する日本人抑留者の墓地のうち、最も重要な日本人抑留者の共同墓地として整備されています。

2015年10月に、安倍晋三首相がウズベキスタンを訪問した際に墓参しています。

旧ソ連時代の1945～1946年に、シベリアから強制移送された日本人抑留者の総数は25,000人を数えます。

立正大学ウズベキスタン学術調査隊発足にあたって顧問をお願いし、2016年9月にテルメズで逝去された加藤九祐氏もシベリア抑留を経験されています。

墓地は緩やかな丘上に広大に展開しており、最も奥まった場所に日本人墓地が整備されて造営されています。また、墓地の入り口の正面にある日本人抑留者の資料館は、安倍首相訪問時に整備・公開されています。

ウズベキスタンに移送された日本人抑留者は、制限された食事のもとで建



左：読経する手島一真  
隊員 右：資料館内  
部の展示

日本人墓地：鎮魂碑

設労働、工場労働、炭坑などで過酷な労働を強いられ、日本への帰還がかなわず無念にも異郷の地で逝去された方は合計884名の多くを数えます。日本人抑留者の建設にかかわった建物としてはタシュケント市内のナヴォイ劇場が著名であり、安倍晋三首相の訪問に合わせて改修されています。

墓地は20m四方ほどの敷地に埋葬者の伏碑を整然と並べ、鎮魂碑が建立されて整備されています。墓地の周囲には桜樹も植えられ、英霊に対して尊敬をもって対処されています。

資料館は2階建ての建物の一階に設置されています。個人で蒐集された、日本人抑留者の生活にかかわる様々な

YAKKASARAY 墓地



1類



2類



3類



4類



最新の墓標



墓標製作の様子

資料、墓地建設当時の文書などが2部屋に展示されています。

日本人墓地に隣接しては、ドイツの抑留者の墓地も造営されています。合計19名の伏碑文が整備されて保護されています。

## 墓標の様相

YAKKASARAY 墓地は、イスラム教に基づいた地元住民の墓地として造営されています。3年ほど前には古びた家屋の間に入口がありましたが、その後改修された墓地の入り口近くには新しいモスクが建立されています。

墓地には1000基を上回る墓が造営されており、年代に従った墓標の変遷が確認できます。

1類は煉瓦を組合せた方柱状の本体

の上部に3段ほどの笠部を造作してコンクリートで仕上げるものであり、正面上部に故人の写真を設け名前と生歿年を記しています。1952～1979年の没年が確認できます。

2類は、煉瓦を素材とする点は1類と同じく頂部を半円形に造作しています。1968～1977年の没年が知られます。

3類は横長の石板を鉄製の枠で支え、名前と生歿年を記した墓誌を支えるものです。同じ形状で石板を鉄板に代えた類例では、上部にイスラムの三日月のシンボルを付設しています。

4類は上の狭まった方柱状の頂部を尖らせた形状の鉄製の墓標であり、1962～2002年に3基を確認できます。

墓地の主体を占めるのは、厚さ10cm、幅60cm、高さ200cmほどの石板に故人の顔ないしは上半部、稀には全身像を

表した墓標です。頂部を平坦とする資料と、片側を高くする資料が数的に拮抗しています。

市内の他の墓地入口で営業する石工で確認したところでは、石板に故人の顔を表すには写真を横に置き、これをもとにして拡大模写して作業していました。墓石費用は日本円で5,000～6,000円ほどのことでした。

墓標に確認できる年代からは、この墓地は1950年代に開設され、当初煉瓦積みであった墓標が、石板を鉄枠で支えるものとなり、ついで人物像を表した石板製品が主体を占めるようになっていきます。

最新の事例は、石製の墓標が低い横型が目立つところであり、頂部を緩やかに中央部を突出させる形状は日本における横型墓標に等しいものです。



# ウズベキスタンの言語風景

## ～ウズベキスタンでは何語を話せばよいでしょう？

立正大学心理学部准教授(社会言語学)、日本文化紹介のため調査隊に随行 **ウンサーシュツツ・ジャンカーラ**  
 マンガ等のメディアにおける言語活用を研究。  
 帰国後3週間の朝食はウズベクパンでした。

多民族社会のウズベキスタンでは、ウズベク語やロシア語、様々な言語が耳に入ってきます。調査にあたり、現地の方々とのコミュニケーションが不可欠ですが、ウズベキスタンのことばを事前に勉強しておく、研究がより円滑に進められます。

### ウズベキスタンの言語事情

ウズベキスタンに行くと、様々な文字が目に入ってきます。同じ看板の中でも、外国人として馴染みのない文字が載っていることが多くあり、ローマ字だけではついていけません。英語を母語とする人として、どこに行ってもいいよね、と言われることがしばしばあります。しかし、世界的に見ると、英語が必ずしも役に立つとは限りません(英語教員としては認めるのは賢明ではないかもしれませんが)。世界の言語データをまとめて公開しているEthnologueによると、英語の母語話者は現在3.8億人いるようですが、一見して非常に多いように感じられます。しかし、全人口が75億人もいることを考えると、そうではありません。地域により、英語があまり浸透していない国もあり、ウズベキスタンは、その一つです。

では、ウズベキスタンに行く前に、何語を勉強すればよいのでしょうか。ウズ

ベキスタンの公用語は2950万人の話者がいるウズベク語で、勉強することには越したことがないでしょう。ウズベク語はテュルク諸語の一つであり、同じ語族に入っていることより、トルコ語ができると得だかという話も聞いたことがあります。残念ながら、日本でウズベク語が勉強できる大学や機関は現在限られています。独学が苦手でしたら、世界的に1.5億人の母語話者がいて学習機会の多いロシア語を選ぶのも一つの手かもしれません。

ソ連時代のウズベキスタンでは、ロシア語も公用語として用いられていました。ソ連の崩壊にともない、ウズベク語を活用する方針が強化され、ロシア語が少し衰退しているようですが、リングワ・フランカとしていまだに重要です。余談ですが、ウズベキスタンでは「ロシア語ができますか」と初めて聞かれました(それもロシア語で)。とくに首都のタシュケントではロシア語がまだ重要であり、メニューや看板を読むために、キリル文字の読解力が不可欠です。ち



図1: 息子がNYのクイーンズにお住まいというチャールズ・バザールのおじさん

なみに、ウズベキスタンがソ連に吸収されたのち、ウズベク語がロシア語と同様にキリル文字で書かれるようになります。ウズベク語の活用強化の一環として、1992年よりローマ字で書くことが決定されました。新しいものはともかくとして、古い看板や本であれば、キリル文字であってもウズベク語の可能性もあります。

### 英語とウズベキスタン

もちろん、英語がまったく役に立たないわけではありません。小学校の低学年からの英語教育が強化されているという話も聞いておりますが、多くのウズベク人が外国にも出ており、人気の行先の一つは、私の母国のアメリカです。実際に、道端で急に英語でアメリカについて懐かしそうに話してきた人もいましたし、タシュケントの市場のはちみつ売りのおじさんとお話をしていたら、なんと息子さんが私の地元で現在住んでいる、というちょっとした出来事もありま



図2: 英語 (Max Factor, Bliss) やドイツ語 (SchwarzKopf)、フランス語 (Bourjois) の看板も見られるタシュケントの風景



図3: お茶文化のサマルカンドでは、コーヒーは観光客向け?

した(図1)。また、首都のタシュケントを歩くと、看板で英語が目に入ることもあります。そのほとんどがブランド名やメニューで、用途的に限られています。身近に感じられるでしょう(図2)。とくにhamburgerやpizzaは英語で表記されることがよくあり、母語話者としては、ジャンクフードと英語の関連性の高さでなんと表現できない複雑な気持ちになります。観光客がより多く行くサマルカンドでは、英語による案内板も見られます(図3)。現在のウズベク政権は、観光客の受入れの緩和を心がけており、外国との貿易関係も重視しているため、これから英語がますます大事になっていくでしょう。

### 多言語社会のウズベキスタン

また、場所によって他の言語にも触れられます。イスラム教徒の多いウズベキスタンでは、アラビア語がまた特別な存在です。聖典のクルアーンは、古典アラビア語で書かれていますが、ム

ハンマドが神のことばを与えられ、それが書記により書き写されたこととされています。そのため、翻訳では神のことばが正しく表現されないという考えがあります。ウズベキスタンではアラビア語が日常生活でまったく利用されていませんが、イスラム教において重要であることには変わりはなく、最古のクルアーンの一つであるウスマーン写本はタシュケントで収蔵されています。サマルカンドのイスラム教関係の観光見どころでは、アラビア語が看板に書かれてあることもあります(図4、図5)。ウズベク語は、1940年よりキリル文字で書かれるようになる前の1928年より、ローマ字が用いられていたのですが、実はそれより前はアラビア文字で書かれていたという歴史もあります。純粋な年数だけでいえば、アラビア文字で書かれた時間はよほど長かったことになります。

多民族社会である関係より、タジク語やカラカルパク語という中央アジアの言語を日常的に話す人も多です。複雑な歴史的な背景より、韓国にルーツ



図4: シャーヒ・ズィンダ廟群へのウズベク語・アラビア語・ロシア語・英語による案内



図5: シャーヒ・ズィンダ廟群を訪れた筆者



図6: ナヴォイ劇場前のウズベク語・日本語・英語によるプレート

がある人も25万人おり、韓国語を話す人もいるそうです。韓国との貿易は盛んなようで、その関係もあるのか、ロッテホテルはタシュケントのよいホテルとして挙げられる一例です。日本語も、出合う可能性が0ではありません。タシュケントにあるナヴォイ劇場は、戦後日本人の捕虜によっても建てられたのですが、現在、その事実を証言するプレートが設置されています(図6)。

近年、社会言語学ではlinguistic landscapes(言語風景)に着目した研究が増えており、街中で目にする看板や標識における言語的情報の分析を通して、その地域における異文化の受容や態度を考察します。ウズベキスタンで散歩するだけでも、様々な言語による看板を目にし、どのような変遷を経てこの複雑な言語状況ができたのかを考えさせられます。これからさらに変わっていくであろうことを鑑みると、きっと多民族・多言語社会のウズベキスタンは、言語風景研究における興味深いケーススタディになるでしょう。

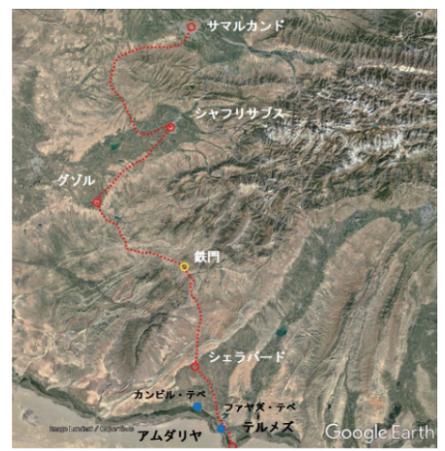


# サマルカンドから テルメズへの ルートをたどって

立正大学地球環境科学部 島津 弘  
教授(自然地理学)

専門は河川の土砂移動と地形形成の研究  
羊の肉が大好きです。ラグマン、プロフは大好き。

調査を行っているテルメズは、シルクロードの都市のサマルカンドからインドへ至る道上にある。7世紀には、玄奘三蔵も通ったと考えられている古からの重要ルートである。この街道はどのような場所につくられたのだろうか。古い街道にほぼ沿うようにつくられたと思われる。快適に舗装された現代の国道(2018年現在も整備は進行中)を実際にたどりながら見てみよう。



サマルカンドからテルメズのルート (Google Earth画像に加筆)



地層の傾きを反映した山の形



分水界近くの風景



シェラバード手前の立ちはだかる石灰岩の壁



スルハンダリヤ平原に浮かぶ月

## 茶色の大地を進む道

砂漠の道、これは過酷なように思えて、中央アジアではとても理にかなった道筋である。

サマルカンドを出た道はまっすぐザラフション山脈の麓へと向かう。山麓には山から川の水によって運ばれてきた土砂が堆積してつくられた扇状地が並んでいる。街道はこの扇状地の中腹を西へと進む。正面のザラフション山脈を越える道もあるようだが、それよりも山麓を通った方が楽である。この地域は冬に雨(山地では雪)が降る。雪となっ

て蓄えられた水は春から夏にかけて融け、川となって流れ、地下にもしみ込む。これが、山麓の集落と農業を支える水となる。街道はその水のある場所に沿ってつくられた。茶色の大地の中を延々と進むように見えて、意外にも「水」を結ぶようにつくられているのである。この風景はシャフリサブスを通して、グゾルまで続く。

## 山へ向かって延びる道

グゾルからは、シャフリサブスのあるカシュカダリヤ州とテルメズのあるスルハンダリヤ州を隔てるチャクチャル山脈

を越えるルートに入る。標高2000～3000mの山々が連なり、4000mを超える山もある山脈であるが、日本の山脈とは風景は全く異なる。高原の中に所々突き出た山々や尾根が見えるだけである。木が生えていないため、山をつくる岩石の地層の様子をそのまま見ることができ、山は地層の傾きにに応じた形になっている。この地形はケスタと呼ばれる。

## 地層に沿った 細い谷の中を通る道

西のカシュカダリヤ(川)と東のシェラバード川の分水界となっている峠を越えるが、一般にイメージする峠とは違い、

いつ越えたかもわからない。ここから道は褶曲した地層がつくり出した谷の中を下っていく。分水界を越えて間もなく、現代の道はそのままやや広めの谷を下るが、古い道はその北東側の狭い谷へと入る。ここが「鉄門」と呼ばれた場所である。石灰岩の割れ目に沿ってできたとても狭い谷である。大きな石がごろごろして、春先には毎年のように鉄砲水や土石流が発生していると考え

られる。このような通りにくい、災害リスクもあるところに道をつくったのは、そこを通る人々を監視しやすくするためだろう。長さ2kmの峡谷であるが、昼なお暗い切り立った崖の下を歩いていると、自分はどこへ向かっているのだろうと怖くなる。この狭い峡谷を抜けると開けた場所に出て、現代の国道と合流する。ここにはスルハンダリヤ州への出入りを監視する現代のチェックポイント

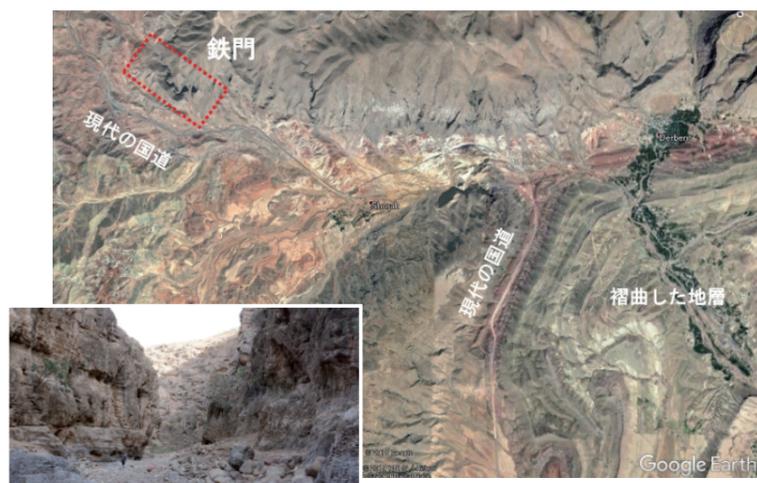
が設置されている。道は緩やかにカーブしながら、どんどんと下っていく。このカーブが褶曲した地層の形そのものだが、衛星写真などを見なければそのことには気づかない。両側の尾根は硬い地層の部分が侵食され残ったものであるが、道はそれを所々で乗り越えて、最終的にはシェラバード川の谷に出る。シェラバード川に沿った平坦な段丘地形の上を道は下っていく。

## スルハンダリヤの 平原を下る道

シェラバードの手前、硬い石灰岩が壁のように立ちはだかる場所をシェラバード川は突き抜ける。この地形はこの土地が隆起する前から流れていた川が、壁のように隆起してきた岩を穿ちながら谷をつくったことによってできた。壁を抜け、平原に出ると耕作地が広がっている。真っ平らに感じるがテルメズ近くまでずっと緩やかに下っていく。途中でこの平原を刻んで流れるシェラバード川を渡り、ファヤズ・テベ、オールドテルメズが右に、ズルマラ仏塔が左に見えたらテルメズはすぐそこである。



ザラフション山脈の山麓の扇状地上を行く



鉄門と褶曲した地層に沿って作られた谷 (Google Earth画像に加筆)



鉄門の峡谷



## 佛教東漸 シルクロード巡歴

### 京都新聞社 編

京都新聞社  
1992年7月刊

## 西域の遺跡・生活・歴史の調査紀行と画竜点睛の研究ノート

大谷探検隊をご存じだろうか。「西域は仏教興隆し三宝流通せる故地なり。ことに新疆の地たるは印度と支那との通路に当たり、両地文化の接触せしところにして、また実に仏教東漸の衝衝なり。」(『西域考古図譜』)

それは、明治から昭和に生きた仏僧・大谷光瑞師が、仏教伝来の足跡を調査すべく、20世紀初頭に組織したものである。当時、欧州列強の触手が及びつつあった中央アジアは「最後の秘境」といわれ、各国による探検熱を呼び起こしていた。光瑞は留学先のロンドンでその熱を直に感じ、帰国に際して中央アジア、パキスタン、インドの仏跡探検を綿密に計画し実施した。発見された貴重な遺物や文書などは、『西域考古図譜』『新西域記』『西域文化研究』『大谷文書集成』などに収録された。

ところで本書は、京都新聞の創刊110年キャンペーンの一環として52回にわたり連載された《佛教東漸》を全収録したものである。同社では「西域仏跡学術調査隊」が組織され、5世紀の

法顕と7世紀の玄奘が天竺へ旅した道、さらに光瑞師が探検調査した仏跡を参考に、綿密な取材ルートの設定と現地予備調査、そして4カ月・3万キロにわたる現地本調査に基づき執筆された。執筆に際しての視点として、遺跡を中心としつつ、シルクロードの風土や宗教、さらにはそこに生きる民族の生活に至る歴史の興亡から捉えた、と書籍の帯に紹介される。かように多角的な視点から記述された紀行文は、自分一人では気づきにくい事柄に目を向けさせてくれる。それほど読者の五感をさまざまに刺激しつつ、さらに知識の上で補うように、豊富な図版写真や地図、そして歴史的背景や事項説明が非常に充実した出来となっている。

本書の構成は次のとおり。

- I 西域に行く
- II 大谷光瑞の足跡
- III 研究ノート
  - 杉山二郎 宗教思想と物質文明と
  - 樋口隆康 仏像の誕生

- 井ノ口泰淳 — ガンダーラの仏像
- 加藤九祚 シルクロードの仏典
- 山折哲雄 中央アジアの仏教遺跡
- 片山章雄 「無我の仏教」から「無私の仏教」へ
- 藤枝晃 大谷コレクションが語るもの
- 藤枝晃 西域学の課題

研究ノートは、各4～6頁の短篇ながら、仏教の伝播に関わる重要なテーマへの専門家知見が示されたもの。刊行から四半世紀以上を過ぎた現在でも、それらテーマへの基本的な視座を示すものとして有益な記述である。

なお、ここに登場した加藤九祚先生は、本学調査隊の顧問であられた(2016年に現地で逝去、享年94)。いまだ“若き70歳”の往時の、壮健なる精神がほとばしる文章として、銘記したい。

立正大学仏教学部 教授  
(東洋史・仏教史)、調査隊隊員  
**手島一真**  
専門は中国南北朝隋唐時代の仏教・宗教社会史。アレクサンドロスも通った鉄門址は必見。ビーツのヨーグルトサラダはピカイチでした。



## 大月氏

### 中央アジアに謎の民族を尋ねて (新装版)

小谷仲男 著

東方書店  
2010年3月 (旧版: 1999年12月) 刊

## グレコ・バクトリア王国、大月氏、クシャン朝を知るための最適な一冊

ウズベキスタン、とくにテルメズの仏教遺跡を見に行くという人から、どの本が参考になるかと尋ねられたことがあった。また既に当地に行った人からも尋ねられたこともあった。その際、紹介した一冊が本書である。

本書は、大月氏に関わる漢文史料をさまざまな観点から解釈を示したうえで、アフガニスタン北部およびウズベキスタン南部を中心とした地域(バクトリア、トハリスタン)と中国の新疆ウイグル自治区の前3～後3世紀の遺跡や発掘成果を紹介する。それによって大月氏と前後の王朝と見なされるグレコ・バクトリア王国とクシャン朝について多くのことを知ることができる。

『史記』大宛伝、匈奴伝などの漢文史料によれば、大月氏は現在の敦煌の南の祁連山付近に居住していた遊牧民・月氏の末裔であり、月氏は北アジアで強勢となった匈奴に圧迫され、前2～1世紀の間にアムダリヤの北岸付近に移住し、大きな勢力を築いたとされる。そして、麾下にいた五翕侯(ヤブグ)の

うちの一翕侯が貴霜(クシャン)であり、後に台頭してクシャン朝を建てたとされる。大月氏についてもクシャン朝についても自身が編纂した史料は見つからないので、漢文史料は日本考古学における『三国志』魏志・倭人伝と同様重要である。

ここで例によって本書の目次を紹介しておこう。

- 序章 遊牧民族と文明社会
  - 漢と匈奴
- 第一章 西方の覇権争奪戦
  - 張騫の遠征
- 第二章 月氏西遷をめぐる
  - 塞民族の虚構性
- 第三章 バクトリア王国と大月氏
  - アイ・ハヌム遺跡
- 第四章 クシャン王朝の勃興 (1)
  - 碑文から大月氏との関連を探る
- 第五章 クシャン王朝の勃興 (2)
  - ティリア・テベの黄金遺宝
- 第六章 大月氏の足跡を尋ねて (1)
  - スルハン・ダリア流域の遺跡
- 第七章 大月氏の足跡を尋ねて (2)

— 天山北麓の遺跡  
終章 ユーラシア草原地帯の考古学  
本書は大月氏とクシャン朝に焦点があり、仏教文化的な説明は多くない。ただ、本題からすれば当然で、4世紀以前のウズベキスタンやテルメズの地にどのような民族が交錯したのか、史料や遺跡からどのような歴史をよみとれるかを知るには最適な書籍である。

かつてダルヴェルジン・テベやハルチャヤンを調査したソ連の学者はそれらを大月氏の居城・離宮とみなした。今では否定的見解が多いが、アムダリヤ北岸の遺跡群の位置づけはいまだにあきらかではない。なお、近年、スルハンダリヤ北部の山岳地域の発掘を続ける中国隊が大月氏に関わる遺跡を発見したとの報告もある。これからも大月氏の行方が注目されていくことは確実である。

立正大学文学部 准教授  
(東洋史)、調査隊隊員  
**岩本篤志**  
専門は内陸アジア史、中国南北朝隋唐史。現地のビールはサルバストとバルティカ3がおすすめ。

# 博物館みて歩き

## テルメズ考古学博物館



テルメズ考古学博物館（またはテルメズ考古博物館）は中央アジア史におけるこの町の重要性を感じさせる展示物で満たされています。博物館の建物は市内の目抜き通りのアッテルミズィー通りに面した一段と高い場所にあり、ウズベキスタンの博物館の公式サイトによれば、当館はテルメズの歴史2500周年を記念して2002年4月に開館したとのことです。また2017年に大規模な改装がおこなわれました。以下は改装後の様子です。

展示室は1Fと2Fにあります。館長によれば所蔵品は現在10万点を超え、特に貴重なものだけで2万点以上（5000点余を選んで展示）とのことです。

まず玄関をはいった直前の1Fのホールの中にはスルハンダリヤ州の遺跡の位置を示すジオラマがおかれ、周りに展示品があります。これらは主にクサン期から古テルメズや近くの仏教遺跡からの出土品です。なお、テルメズの仏教遺跡カラ・テペの出土品の展示が少ないのは、ほとんどはタシュケント

立正大学文学部 准教授 (東洋史)、調査隊隊長 **岩本篤志** 専門は内陸アジア史、中国南北朝隋唐史。現地のビールはサルバストとバルティカ3がおすすめ。

立正大学文学部 講師 (博物館学)、調査隊隊長 **紺野英二** 専門は考古学、南武蔵の古墳。体調の悪い時はウオッカを飲めといわれたが、おすすめはスイカとメロンと青い空。

に保管されているためです。また展示品には複製品もふくまれています。例えば、著名なダルヴェルジン・テペ出土の「とんがり帽子」の貴族像の頭部がそれですが、複製品かどうか明示されていないのは惜しいところです。

次に玄関から向かって1Fの左の部屋に移動します。テルメズ市名誉市民でもあった故加藤九祚先生を記念して2017年に設置された部屋です。奥に先生の写真や著作が展示されていますが、展示品の多くは必ずしも先生の発掘活動に関わるものではありません。これらは、古テルメズや近くの仏教遺跡から出土した遺物です。

近くの階段から2Fにあがると石器時代から現代までに分かれた展示コーナーがあります。注目されるのはこの町が歴史的に重要な役割を担っていたヘレ

ニズム期からティムール朝までの展示品です。遺物を遺跡の模型や現状の写真とあわせて展示するなど工夫がみられます。2Fフロアを端まで見て、昇ってきた階段とは異なる階段で1Fに降りると、（玄関から見て1Fフロアの右側）に金庫室があります。中には当地で発見されたグレコ・バクトリア期から近代に至るまでのコインや宝飾品が100点以上展示されており壮観です。ただ開室してないこともあります。また中庭には、スルハンダリヤ州で発見された柱頭や柱礎が多数並んでいます。こちらにも案内を要するかもしれません。展示品全てを見ると2時間以上かかります。

以下では数点の所蔵品を選び、次に個別に紹介していくことにします。  
(岩本)



### 古テルメズの「置きカマド」？

2階の通史展示のなかからひとつの生活用具の遺物に注目しました。展示品のキャプションには、以下のように説明されています（3行目の英文引用）。

「A ceramic fire place, Old Termez, 9-10ce.」

「古テルメズで発見された9～10世紀」の「素焼きの炉」、「カマド形土製品」と呼ぶべきでしょうか（以下では「土製品」としておきます）。カマドとは、土・石・煉瓦などでつくった、煮炊きするための設備であり、上に釜や鍋をかけ、下から直に火を焚き加熱する構造を備えています。

展示されている「土製品」は、高さ40cm程度で「Ω」形の平面形を呈していることから、中央に鍋などをかけ、火を焚くものと想定できます。また、出土時の状況がわからないのが残念ですが、日干し煉瓦で建造物などを造る当地において、移動されることを前提に造られたものかもしれません。

この「土製品」について、展示したままでも粘土の断面やつなぎ目などがよ

く観察できることから、その製作方法を考えてみました。

- ①まず粘土を厚さ3cmほどの長方形（10×20cm）の板状に成形します（粘土板を10枚程度作製します）。
- ②先に成形した粘土板を上下に2段並べ、繋いだものを数個作ります。
- ③2段に繋いだものを平面形が「Ω」形になるように並べます。
- ④「Ω」形に並べたものを繋ぎ、縁や裏面などを補強します。
- ⑤補強したものに、波形突帯の装飾などを施して、これを乾燥させて出来上がりです。

さて、この「土製品」に似たものは、日本では「置きカマド」の名称で知られています。

わが国にカマドが伝わったとされるのは、5世紀のことといわれています。朝鮮半島から伝わったとされるこの技術が、新たな土器の形や用途を生んでいきます。わが国で発掘されるカマドのほとんどは粘土などを固めて構築されています。しかし平安時代以降になると、関

東でもこのカマド形土製品（「カマド形土器」ともいう）がいくつも発見され、カマドの神様を祀る同型のミニチュア土製品なども発見されています。また、中国などでも墓の副葬品などの明器としてカマド形土製品の存在が知られています。

話をテルメズに戻します。この「土製品」が発見された古テルメズは、アムダリヤを隔てた対岸のアフガニスタンと当地の渡河点に栄えた城塞都市です。城壁の内側には「市」などもあり、さまざまなモノやヒトが行き交い、長きにわたり交易の拠点として機能してきました。ほかに当地の城塞都市では、カンピル・テペなども知られます。アフガニスタンより川を越えてやってきた人びとの中には、写真のような土製品を使った人びとがいたのかもしれませんが。このような土製品は、もともと当地で考案されたのか、アイデアが持ち込まれたものなのかいずれにせよ興味深いところでは。

(紺野)



## バラリク・テペとタフカ・クルガンの壁画

ウズベキスタンからは8世紀以前の壁画が多数発見されており、世界的注目を集めてきました。テルメズ考古学博物館の2階展示室に逸品が展示されているので紹介します。

第1はバラリク・テペの壁画です。当館展示品は、スルハンダリヤ州のアンゴル付近に位置するバラリク・テペで1950年代に発見された一部です。報告書刊行後の1960～70年代の日本でも大発見としてとりあげられました。ただ当時発表された全体素描と比べると本品はわずかに1/12ほどに過ぎません。他の部分は各地の博物館に分割保管さ

当館所蔵品部分の素描（『國華』第937号・土居論文より）



れたといわれており、現状の調査が待たれるところです。なお立正隊は2015年に遺跡の現状を視察する機会にめぐまれました。遺跡は小学校の校庭を横切った民家の庭先にありました。

遺跡は台形状の大きな遺構と付属する小さな遺構から成り、大きな遺構は一辺約30mのほぼ正方形の底辺で高さ約10m、最上部は約24×24.5mの広さです。また高さ約6mの小さな遺構が付属しています。壁画は城砦と思しきこの大きな遺構の上部の西北側の正方形の部屋の四方を飾っていたとされ、全体素描によれば当館展示品は南壁の右端部分とみられます。発掘に携わったアリバウム氏は壁画を5、6世紀（エフタル期）の書写と報告しました。これについて美術史家の影山悦子氏は服装の意匠の観点からエフタル支配期の影響とみる説を提示していますが、美術史家の田辺勝美氏は、6世紀後半～7世紀初期の西突厥治下で制作されたとみえています。また、ウズベキスタンの考古学者ルトヴェラゼ氏も5～7世紀の諸説



タフカ・クルガンの壁画（展示の一部）

を紹介しており、年代比定の一致した結論をみていません。

この壁画はソ連時代の修復による痛みが激しいことから、当地で長年活動してきた古庄浩明氏に相談がもたけられ、クラウドファンディング等の資金で修復士の犬竹和氏によって2017年に基本的な処置が施されました。当方も協力させていただきました。

第2はタフカ・クルガンの壁画です。タフカ・クルガンは、スルハンダリヤ州のシェラバッド付近に位置する城砦遺跡です。立正隊では遺跡は未見です。壁画の年代は展示のキャプションによれば5、6世紀とされています。ラピスラズリが用いられたであろう背景や人物の目の描き方はかなり特徴的で、アフリアブやベンジケントの壁画との関係性があるのではと直感させます。なお、フランスの考古学者グルネ氏は、サマルカンドの南に位置する城砦遺跡カフィル・カラで2017年に発見された炭化した浮き彫り板絵の年代をエフタル期とする説を提唱しています。

サマルカンドやシャフリサブズのあるソグディアナ地域とスルハンダリヤ地域との間には山脈が横たわりますが、両地域をつなぐ古道や鉄門は今にその面影を残しています。これらの資料から両地域の歴史の実態に迫れるのでは、と期待が膨らみます。（岩本）



バラリク・テペの壁画（2014年撮影）

## お知らせ

立正大学ウズベキスタン学術交流プロジェクトシリーズ創刊!

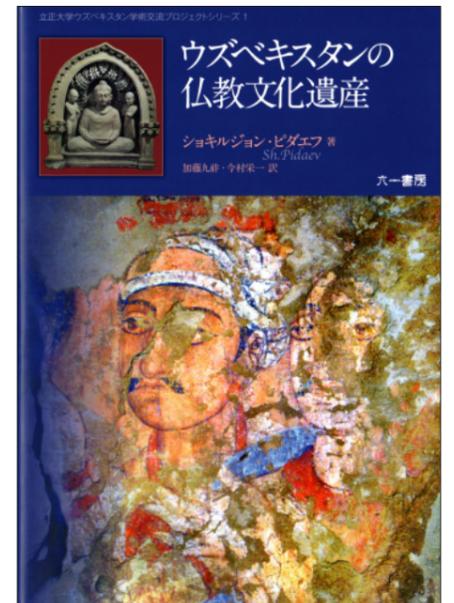
ショキルジョン・ピダエフ著  
加藤九祚・今村栄一訳

### 『ウズベキスタンの仏教文化遺産』

六一書房、定価〔本体1400円+税〕、2019年3月

本書はウズベキスタン科学アカデミー芸術学研究所所長のショキルジョン・ピダエフ氏の著作で2011年にタシュケントのウズベキスタン出版社から公刊された*Буддизм и буддийское наследие Древнего Узбекистана*（露・ウズベク・英語併記）とウズベキスタン科学アカデミーの雑誌*Фан ва турмуш*（Наука и жизнь Узбекистана）（2016年3・4号）に掲載された同氏によるカラテペの新発見の壁画に関する論文の翻訳から構成されています。内容はウズベキスタンの仏教遺跡およびその遺物を紹介したもので、スルハンダリヤ地域の遺跡は主に2～4世紀、フェルガナ地域の遺跡は7世紀頃のものともみられています。本書で注目すべき点は、ピダエフ氏の新論文の翻訳と収録された豊富な写真です。本書がウズベキスタンへの旅に、また中央アジアの仏教遺跡の理解に役立てば幸いです。

随時、講演会などで調査の成果をご報告していきます。詳細はわかり次第、Facebook、ホームページにて告知します。



## 編集後記

『ウズリす』は、文部科学省私学研究ブランディング事業「立正大学ウズベキスタン学術交流プロジェクト」の広報誌です。立正大学ウズベキスタン学術調査隊の活動を通して、ウズベキスタンの文化や人びとを紹介します。今号は前号までよりもページを増やし、内容もバラエティに富んだものとなりました。なお、展示物の写真については、テルメズ考古学博物館から掲載の了承をいただいています。また、今年度はこれまでの成果に関する複数の報告書の刊行が予定されています。

### 「立正大学ウズベキスタン学術交流プロジェクト」スタッフ

- ◇調査隊隊長 安田治樹（仏教学部 教授）
- ◇調査隊副隊長 池上 悟（文学部 教授）
- ◇プロジェクトリーダー 岩本篤志（文学部 准教授）
- ◇主管部局 研究推進・地域連携センター／研究推進・地域連携課
- ◇関係部局 広報課

### ウズベキスタン学術交流プロジェクトニュースレター

- ◇編集委員 岩本篤志、紺野英二、手島一真

文部科学省 私学研究ブランディング事業  
「立正大学ウズベキスタン学術交流プロジェクト」

## ウズリす 第3号

2019年7月19日発行

編集・発行  
立正大学 ウズベキスタン学術交流プロジェクト  
ニュースレター編集委員会

〒141-8602  
東京都品川区大崎4-2-16  
立正大学 研究推進・地域連携課

<http://www.ris.ac.jp/branding/about.html>  
<https://www.facebook.com/RisshoUniv.Uzbekistan/shien@ris.ac.jp>

印刷 株式会社ダイヤモンド・グラフィック社

専門は18世紀西洋史。現地のチーズは塩気があり、おつまみにぴったりです。現地のビールとともに楽しめます。

## 青いウズベキスタンと「ウズリス」の唐草模様

私は2018年度の立正大学ウズベキスタン学術調査隊に、大学院生として9月4日～21日の17日間の日程で参加しました。調査の合間に訪れたサマルカンドを始めとする建物の装飾について報告します。

サマルカンドは青の都と呼ばれます。それは澄んだ青い空とシャーヒ・ズィンダ廟群などの建物に多く使われているタイルが青いからです。この青は中国のタイルと現地の顔料コバルトが合わさったことで生まれました。文化の交差点に位置したことが「青の都」を生み出したというわけです。

この青いタイルはアラベスクと呼ばれる文様で装飾され、私たちが長く滞在したテルメズでも使われていました。アラベスクは大きく、三つの種類に分けられるそうです。第一は、クルアーンの一節などのカリグラフィ、第二は、幾何

学模様、第三は、草花が彩られた非常に美しい植物文様があります。テルメズにあるスルタン・サオダット廟の壁には、イスラームの世界を象徴するアラベスクと昔信仰されたゾロアスター教の世界を表す文様とが組み合わせられています。アラベスクを含むイスラームの様々な装飾には、地方ごとに伝統文様が入り入れられているようで、人々の芸術への意志と努力をみることができます。

最初に人々の芸術への意志に注目したのは美術史家のアロイス・リーグルです。彼は人々の芸術意志が装飾を発展させたといひ、装飾の歴史の大きな流れを描こうとしました。彼は、古代オリエントの線模様がギリシア・ローマ時代を経て唐草模様になり、そしてアラベスクになったことを証明しようとしたのです。唐草模様は本誌『ウズリス』のロゴにも使われています。

古代ローマでも、唐草をもとにした文様が建物を飾っていましたが、空想を含む動物たちが描かれている点でアラベスクと少し違います。その文様は埋もれたネロの黄金宮殿で最初に発見されたため、地下室(Grotto)、グロテスクと名付けられたそうです。グロテスクとアラベスクは、ルネサンスの時代からヨーロッパに流行して、イギリスでは18世紀の建築家たちが両方の装飾をアレンジして取り入れています。面白いことに、ヨーロッパではアラベスクが一般的な言葉となり、グロテスクは吸収されて、「奇妙な」という意味が強くなっていきます。アラベスクの植物文様がヨーロッパを魅了したのは、東洋と西洋の人々の交流から生まれ、磨き上げられた美しさがあったからでしょう。ウズベキスタンの建物の装飾には、アラベスクの中に伝統模様がアクセントとして使われており、さらに心を惹きつけます。掲載した写真の少女が着ている服のペーズリー柄もアラベスクと深い関係があるなど、この国では小さな発見がたくさんあり興味を引きます。



シャーヒ・ズィンダ廟群 (サマルカンド)



スルタン・サオダット廟の装飾 (テルメズ)



チーズを売っていた少女との写真 (鉄門址周辺)